兵庫教育大学　研究紀要　第50巻　2017年２月　pp. 37－50

育鵬社中学校歴史教科書[新編]『新しい日本の歴史』をどう読むか
－『ともに学ぶ　人間の歴史』（学び舎）との比較を通じて－

A Content Analysis of Ikuhosha's History Textbook for Japanese Secondary Schools by Comparing with Manabisha's

小　南　浩　一*
KOMINAMI Koichi

小論の目的は、2015年に文部科学省教科書検定に合格し、2016年度から使用されることになる育鵬社中学校歴史教科書について、他の教科書特に『ともに学ぶ人間の歴史』（学び舎）との比較を通じて批判的に検討することである。育鵬社教科書の特徴は以下の４点に集約される。

１．日本人の誇りを取り戻すため、日本・日本人へのアイデンティティの一元化を強要する。それは閉じた「記憶の共同体」に安住することとなり、それに障害となる「内における分裂と対立の過去」即ち蝦夷や琉球、沖縄戦の歴史や「外の他者に対する残虐行為の汚辱」即ち南京事件や従軍慰安婦などの記述は排除される。

２．古代から現在まで一貫して継続している日本・日本人の歴史が強調され、断絶や変化が軽視・無視される。そのため、戦後の民主化や非軍事化、日本国憲法の意義についてはほとんどふれていない。

３．隣国朝鮮半島やアジア、世界と日本の関係がほとんど描かれておらず、他の国が日本をどう見ているか、お互いがお互いの運命とどう関わり合っているのかといった視点が全くない。これで、将来生徒たちがアジアや世界の人たちと対等に接することが出来るのだろうかと懸念される。

４．神話や昭和天皇の記述など、日本の独自性や天皇を中心とする一貫性などが強調されている点が、他の教科書に比べ突出しているが、神話はさておき、昭和天皇の記述は史実として正確ではない。

キーワード：育鵬社歴史教科書、学び舎歴史教科書、アイデンティティ、記憶の共同体、パブリック・ヒストリー
Key words：history textbook of ikuhosha, history textbook of manabisha, identity, community of memory, public history

１．はじめに

小論の目的は、2015年に文部科学省教科書検定に合格し、2016年度から使用されることになる育鵬社中学校歴史教科書［新編］『新しい日本の歴史』（A と略称する）について、他の教科書特に『ともに学ぶ人間の歴史』（学び舎）（B と略称する）との比較を通じて批判的に検討することである。なお、多くの中学校で採択されている東京書籍や帝国書院の教科書（いずれも2015年検定済のもの）も適宜参照する。育鵬社版教科書については、極端な歴史観に基づく偏った内容だとして、現場の教師から批判され、採択については各自治体で様々な混乱や問題が生じている*[1]。なお、なぜ特に B と比較するのかは、B が A と対極にある教科書であり、両者の比較によって A の特色がより鮮明になると考えたからである。

分析の視角は①その思想性について、特にアイデンティティの観点から考察する。②歴史教科書は一般の歴史書と違って、総頁数の枠があり、学習指導要領に基づく検定制度という制約がある。しかし、その中で何を記述し何を記述しないかは、教科書執筆者の価値判断による極めて現代的な問題である。「何を忘れ、何をきわだたせるか」という視点に立って、A と B 両者の記述内容の特色を検討する。

２．教科書の執筆者

教科書には、著作者あるいは執筆者が巻末に掲げられているが、B は「執筆　編集」とあり、A は「著作関係者」となっている。A の主な顔ぶれは、伊藤隆、島田洋一、百地章、八木秀次、渡部昇一、渡辺利夫など安倍首相の歴史観や憲法観に非常に近い人たちである。特に島田と八木は安倍のブレーンである五人組のメンバーであり*[2]、八木は第２次安倍内閣の「教育再生実行会議」委員でもある。渡部もその右派の歴史観を披瀝して、後述するように戦後70年安倍談話を100点満点と絶賛した*[3]。憲法学者の百地は2015年の集団的自衛権の行使容認をめぐる憲法解釈について、合憲とした数少ない憲法学者の一人である。さらに彼らに共通するのは、伊藤隆を除いて歴史学の専門的学術書を有せず、教育現場に

＊兵庫教育大学教科教育実践開発専攻社会系教育コース 教授
平成28年10月24日受理

おける歴史の授業実践者でもないことである*[4]。

一方、Bは従来の教科書とは全く違う。まず、教科書の作り方からして異例である。学校現場で歴史教育を実践してきた現職の教員や元教員たちが、教科書図書発行者の指定を受けるため、「子どもと学ぶ歴史教科書の会」を結成。支援者を募って、株式会社学び舎を創業して出版したものである*[5]。もちろん、執筆者の30人余りは、全員、教員や教員経験者である。とりわけ、巻末に名前の挙がっている安井俊夫、岩本賢治、本庄豊などは、大学や中学・高校で様々な新しい歴史授業モデルを提案し、実践してきた人たちである。と同時に彼らは、そうした授業実践に関する専門的学術書を有している。さらに校閲、コア・アドバイザーの池亨、大日方純夫、藤田覚、大門正克などは、歴史学者であり、すぐれた専門的著作群を有する人たちである。いずれが歴史教科書の執筆者としてふさわしいかは、一目瞭然であろう。Aは従来の教科書とりわけBの執筆者たちの歴史観を、いわゆる「自虐史観」と称して批判してきたことから、AとBは対極にある教科書といえるであろう。

ただし、BはAに対抗し、Aを意識して書かれたものではない。むしろ、執筆者たちは育鵬社に対抗するものとして語られるのは不本意だと語っているという*[6]。にもかかわらず、筆者がAと対極にある教科書と前述したのは、Aの著作関係者が、後述するように、日本人としてのアイデンティティを回復する手段として子どもたちに教科書を提示する（押しつける）のに対し、Bは、徹底して「子ども側の視点に立った教科書」であるからだ。教科書を通じて、Aの著作関係者らの言うあるべき日本人を育成し統合しようとする大人（政権）の側に立った教科書ではなく、Bは、学ぶ主体である子どもたちが「つづきを読んでみたい」「何か感じるものに出会う」「問いや疑問がわいてくる」*[7]ような子ども本位の教科書だからである。

3．歴史とアイデンティティ

Aは教科書の冒頭に「歴史の旅を始めよう」と題して、その終わりの部分に「私たちが住んでいる日本という国は、古代に形づくられ、今日まで一貫して継続していることに気づくと思います」（6頁）とある。「一貫して継続している」というのがAのキーワードである。そして、教科書の一番最後にも「歴史の旅の終わりに」と題して再び以下のように強調される。「異なる民族が入り乱れての動乱はおこらず、外国の植民地になったことも」なく、「日本人の精神のあり方が今日まで変わることなく続いています」（281頁）。「日本人の精神のあり方が今日まで変わることなく続いている」というのは、文学的表現ではあるが歴史叙述ではない。これは、現在の日本・日本人が古代からの日本・日本人と連続してつながっているという主張である。「縄文時代の人々も、奈良時代や平安時代の人々も、私たちと血のつながる祖先ということができます」（同上）。

こうして「血のつながり」が強調される。このように、この教科書は過去の日本の歴史と現在の自己との連続性や一体性を強く求めていると言えよう。別言すれば、日本・日本人へのアイデンティティの一元化を強要する。

かつて育鵬社の八木らと同じ陣営にいて、現在は分裂して自由社版『日本人の歴史教科書』を執筆した藤岡信勝も、「はじめに」で「歴史の知恵に学ぶ」と題して「日本人は全体として方向性を見失い、自信を喪失しつつある…日本人が自己を取り戻すのは…モデルを外に求めるのではなく、日本のよき文化と伝統に立ち返り、長い歴史の知恵に学ぶほかはない」*[8]と書いている。つまり、歴史を学ぶ目的は、日本人としてのアイデンティティの確立だというのである。ところが、日本の教科書は「アジアの国々をむごたらしく侵略し、数々の犯罪行為をして来たかのように描かれ…いわゆる『自虐史観』とよばれる、歪んだ一面的な歴史が幅をきかせている…これでは歴史を学んだ子供が日本に誇りを持てなくなり、正義感の強い子供ほど自国を憎むようになる」*[9]と続く。自虐史観については、同じ陣営の西尾幹二も次のように述べている。若い生徒達に南京事件や従軍慰安婦など日本の過去の汚点を歴史という教科で教えることによって、生徒達の日本人のアイデンティティの形成がゆがめられることが問題だと*[10]。しかし、藤岡や西尾の言う自虐史観は自明のことであろうか。筆者自身の経験で言えば、過去に日本人が誤ったことをしたとしても、それでもって日本人である自分が責任を感じたり、恥ずかしいと思ったことはない。過去の日本の歴史と現在の筆者には明らかに距離があり、過去の日本の汚点を学ぶことで西尾らの言うようなアイデンティティが崩壊することはない。筆者のアイデンティティは日本・日本人という国家や民族のみにあるのではなく、日本人という民族の中の私個人の自分らしさ（それは多様である）にあるからである*[11]。過去の汚点を隠蔽して、知らないふりをすることこそ卑屈であり、相手がそのことでどう思っているかを想像出来ないようでは、将来、生徒たちがアジアや世界の人々と対等につきあっていけるだろうかと筆者は懸念する。

自国の歴史を弁護しないで客観的に描こうとする態度こそ、誇らしいと筆者は考える*[12]。善悪の価値判断から戦前の日本もそんなに悪くなかった、植民地時代もいいことをしたといった弁解がましい態度こそ卑屈だと筆者は考える。

2016年5月のオバマ広島演説は、原爆投下に対するアメリの伝統的歴史観から一歩も出ることはなかったが、日本人の9割がこれを歓迎し、謝罪を求めなかった。こ

うした日本人の態度こそ、筆者は誇らしいと思う。後述するようにAは、近代日本がアジアで真っ先に立憲主義を唱え、日清戦争に勝って近代化に成功し、日露戦争で世界の白人支配を覆し、アジアの人々に夢と希望を与えた。さらにはアジア太平洋戦争でアジアを解放して、戦後のアジア各国の独立につながったというサクセスストーリーとしての日本近現代史を描き、そのことで、日本人としてのアイデンティティを取り戻してほしいと考えているのかも知れない。戦後70年の安倍談話の近現代史観もそれと通底している。しかし、歴史はかように単純なものではない。もっと重層的かつ多層的なものであり、わかりやすい因果の枠では収まらないものである。

4．アイデンティティの複数性

原口健治が『歴史教科書とナショナリズム　日本とドイツ』で指摘するように、「過去の日本の汚点を教えることは自虐であるとする議論の前提は、現在の個々の日本人と過去も含めた日本人総体との無条件の同一性という虚構」[*13]である。原口は同書で、アマルティア・センのアイデンティティの複数性を援用している。

> 通常の暮らしでは、われわれは自分が様々な集団の一員であると考えている。そのすべてに帰属しているのだ。一人の人間がなんら矛盾することなく、アメリカ国民であり、カリブ海域出身で、アフリカ系の祖先を持ち、キリスト教徒で、リベラル主義者の女性であって、かつ菜食主義者…学校の教師、小説家、フェミニスト、異性愛者、同性愛の権利の理解者…ジャズミージシャンであり、さらに大宇宙に知的生命が存在し（できれば英語で）緊急に交信する必要があるという考えの信奉者となりうるのである。一人の人間が同時に所属するすべての集合体が、この人物に特定のアイデンティティを与えているのだ。どの集合体も、この人物の唯一のアイデンティティ、または、唯一の帰属集団とみなすことはできない。人のアイデンティティが複数あるとすると、時々の状況に応じて、異なる関係や帰属のなかから、相対的に重要なものを選ばざるを得ない[*14]。

このようにセンは、人間がその時々に応じて複数のアイデンティティから、どれを優先して選択するか、その自由は人間にとって「格別に重要な権利」[*15]だという。一方、西尾やAの著作関係者は、個々の日本人のアイデンティティは「日本・日本人」のみに限定されると考えている。筆者はむしろ、限定されたアイデンティティからの解放にこそ歴史学の目的があるのではないかと考える。日露戦争を日本国の「存立の危機」として闘う為政者や東郷平八郎の立場に共感してもいいし、与謝野晶子の「君死にたもふことなかれ」に共感してもいい。ロシア国民と連帯する社会主義者に共感してもいい。アイデンティティが国境をこえることもあろう。戦場となった中国東北部の住民に感情移入することも可能で、それは自由だ。網野善彦は、「歴史学とは、過去を研究することで、現代人である自分を拘束している見えない権力の働きから自由になるための確実な道を開いていくことであると」「信じていた」。「今日の常識が明日の非常識に変わってしまう光景を、何度も目撃してきた」網野は、「歴史は意識を解放するための方法」でなければならない言う[*16]。筆者がAを読んだときに感じた息苦しさは、Aが過去の日本・日本人への同一化を強く迫り、アイデンティティの選択という人間にとって「格別に重要な権利」を認めなかったことによる。そこには網野の言う「意識が解放される」余地はない。

5．「わが国」という記述

Aには「わが国」という記述が頻出する。これは当時の日本・日本人への同一化を促す装置となっている。即ち生徒に、感情移入を強要することになる。特に戦争の場面など、日本国が危機のときに多様される点に特色がある。日清・日露の記述を見てみよう。

Aは、まず朝鮮をめぐる日清の対立について壬午事変と甲申事変についてふれ、朝鮮情勢について以下のように記述する。「こうした朝鮮をめぐる諸外国の動きの中で、わが国（下線は筆者による。以下同じ）でも、隣接する朝鮮がロシアなど欧米列強の勢力下に置かれれば、自国の安全がおびやかされるという危機感が強まりました。」（188頁）。このように「わが国」の「安全がおびやかされるという危機感」が強調される。こうした危機感の強調は日露戦争の記述でも同じで「ロシアの東アジアでの軍備増強をこのまま認めれば、わが国は存立の危機をむかえると考えた政府は戦争を決意し、1904年２月、日露戦争が始まりました。」（191頁）。

思えば、「わが国の存立の危機」なる文言は、2015年の安倍内閣による集団的自衛権の行使容認をめぐる議論で濫用された言葉であった。Aの著作権関係者が、安倍首相の歴史観を先導していることを考えれば宜なるかなである。こうした「わが国」の記述はBはもとより、東京書籍や帝国書院の教科書にはない。

さて、日清戦争に戻る。Aは、甲午農民戦争がおき、朝鮮政府の要望で清が出兵し、天津条約に基づいて「わが軍」も「出兵したため、両軍は衝突し、日清戦争が始まりました。」とある。これではなぜ日清両軍が衝突したかがわからない。甲午農民戦争はすでに終結しており、内乱鎮定後の撤兵は天津条約の取り決めであり、清国側の回答は論理的なもので、これに従って撤兵すれば日清戦争はなかった[*17]。しかし、日本側は陸奥宗光の主導

により、朝鮮王宮を占領して、「強硬な措置」を取って戦争を仕掛けたことは多くの先行研究が明らかにしている*18。Bでは、「朝鮮王宮を占領して、清と開戦へ」と小見出しにあり、日本側の主体性を明確に記述し、本文で「国王を監禁した日本軍は、朝鮮王朝を倒し…王宮占領の2日後、日本海軍は牙山に到着した清の軍隊を攻撃して、清との戦争を始めました。…国境の鴨緑江を渡って清に侵入し…」(194頁)とあって、日本側が仕掛けた戦争であることが記されている。

太平洋戦争でも「わが国」は多用される。「わが国は石油などの重要な物資をアメリカからの輸入にたよっていましたが…、そのため、わが国でも軍部を中心に、重要物資を産出する東南アジアに進出…結局、わが国は1940年アメリカ、イギリスによる中国への軍事援助ルートを断ち切る…」(231頁)。このようにAはわが国を多用することによって、生徒をリアルタイムで戦場に連れだし、「わが国」の一員として動員しようとする。こうしたエモーショナルな記述は歴史叙述としてふさわしいだろうか。

フォークランド紛争の時、イギリスのBBCはアルゼンチン軍とイギリス軍の戦いと報道したが、時の首相サッチャーはなぜ「イギリス軍」ではなく「わが軍」と書かないのかとBBCを批判したが、BBCは屈しなかった。「報道の目的は英国軍の志気を鼓舞することではなく、敵・味方関係なく公平に事実を伝えることだ」と客観報道に徹したのであった*19。歴史叙述もそうあるべきである。

6．継続・持続と断絶・変化

Aは「私たちが住んでいる日本という国は、古代に形づくられ、今日まで一貫して継続していることに気づくと思います」とあるように、日本、日本人の歴史の一貫性、継続を強調するのが特色であることはすでに指摘したが、逆に歴史の断絶・変化は軽視・無視される。加藤周一と大江健三郎は、1995年に「五十年目に問う戦後」というテーマで以下のような対談をしている。少し長くなるが引用する。

加藤：一九五〇年代の初めにフランスに初めて行った時、歴史意識の強さを感じました。歴史意識が強まるためには、一般的に持続と変化という二つの条件が必要なのです。前の時代から後の時代へと持続するものがある。しかも、そこに変化がなければ歴史意識はおこらない。

大江：文学をやっていますと、ブルクハルトが警戒するように呼びかける、歴史をエモーショナル（情緒的）に再構成しようとする誘惑を感じることがあります。現代史こそそうした思い入れの強さより、客観的に基礎科目のようにしてとらえる必要がある、と自戒します。…

（中略）

大江：良い持続と悪い持続。だれもが自分で歴史を編修します。戦前から戦後へと日本の歴史は持続していると考える人たちは、敗戦や被爆、天皇の人間宣言、東京裁判の部分のフィルムは切り取って前後をつなぐ。そのための基調低音に当たるのが天皇制です。天皇制が続いているから、矛盾に満ちた現代史も持続性においてとらえられる。…

加藤：持続を断ち切る努力をしたドイツと違って、軍国日本に反対した人が政府をつくったわけでもない。戦争観をめぐってことあるごとに大臣が失言し、辞めることが、ほとんど政治的伝統と化している背景には、「切ろう」より「続けよう」という思いが強くある。切るか、続けるのか。戦後五〇年を経てなお基本的な問題だな*20。

「切る」か、「続ける」のか。「切る」姿勢がドイツやフランスのように歴史意識を強めるという。2011年3月の東日本大震災、福島原発事故のあと、澎湃としてわきあがった脱原発の動きをよそに、日本政府はまるで3，11がなかったかのような原発再稼働の方針を堅持し、それどころは安倍政権はインドなど海外への原発輸出を推進し、アンダーコントロールと偽って、東京五輪の招致に成功した*21。かたや、ドイツのメルケル政権は、事故直後の6月、2022年までにすべての原子力発電所を閉鎖する宣言した。原発推進論者のメルケルは「フクシマ原発事故で、原発についての私の考え方は変わった」「わが国は大いなる挑戦をする。世界の先駆者になる」*22としてドイツの原発政策を断ち切った*23。フクシマ後、日本の政策はほとんど変わらず、ドイツは転換した。

ところで、日本の歴史の大きな断絶・変化の一つは、アジア太平洋戦争の敗北を契機とする戦前と戦後の断絶・変化である。持続・継続を重視するか断絶・変化を重視するかで歴史叙述は大きく変わる。戦後、自民党を中心とする日本の保守層は一貫して、この断絶・変化を軽視し、戦前と戦後の継続あるいは連続を重視してきた。Aはこの立場に立って、戦後を記述している。したがって、敗戦後の占領政策である民主化と非軍事化や日本国憲法成立の意義についてはほとんどふれず、わずか2頁の記述である。「民主化」という言葉すら出てこない。

一方、Bは断絶を強調する。「焼け跡からの出発―占領と日本の民主化」とのタイトルで2頁、「もう戦争はしない―日本国憲法」で2頁、「走れ、ぞう列車―戦後の子どもと教育」で2頁、合計6頁にわたって戦後の民主

化による変化が強調される。アジアで2000万人以上の犠牲者を出したアジア太平洋戦争の敗北によって、国家のために個人が犠牲となる明治憲法体制から、一人ひとりの個人が尊重される日本国憲法体制へと国家システムが転換されたことが強調される。天皇や国家のために命を捧げる人間の育成を掲げる教育勅語体制から、人格の完成を目指し、「真理と平和を希求する人間」（263頁）の育成を目指す教育基本法体制への転換が強調されている。

７．「記憶の共同体」

原口健治が前掲書の中で紹介している石田雄の「記憶の共同体」の概念を引用したい。石田によれば、「記憶の共同体」とは、「閉鎖的な『われわれ』という集団を前提として、『かれら』の記憶と区別された共通の記憶が『自然的』なものとして、その集団形成の基礎をなしている場合」にその閉鎖的な集団を指すという*[24]。そして、こうした集合的記憶は、国民が国民としての統合を保持するために必要なものであり、それが歴史教科書であると言えよう。だが、それを「記憶の共同体」へと導く閉鎖的で排他的な集合的記憶にするのか、それとも少しでも開かれたものにしようとするのか、これが歴史教科書で私たちが迫られているもう一つの選択であると原口は言う*[25]。

この原口の定義に従えば、A は閉鎖的「記憶の共同体」の強化を目指すものであり、一方の B はこれとは逆に、『かれら』の記憶に耳を澄まし、そのことで、『われわれ』をも解放しようとする開かれた集合的記憶を目指すものであると言える。さらに、「記憶」の成立には一般に「忘却」の作業が不可欠だが、その忘却の最も重要な対象がなによりも「内における分裂と対立の過去」であり、もう一つが「外の他者に対する残虐行為の汚辱」であると言う*[26]。A が「記憶の共同体」の保持のために何を忘却したいのか。「内における分裂と対立の過去」がヤマトと蝦夷の戦争や沖縄戦であり、「外の他者に対する残虐行為の汚辱」が南京大虐殺と従軍慰安婦である*[27]。

８．閉じた記憶とパブリック・ヒストリー

記憶の共同体を守りたいのはひとり A だけではない。外国でも同じである。例えば、アメリカの原爆投下に対する記憶である。広島・長崎の原爆投下によって戦争が終結し、100万人のアメリカ人と日本人の命が救われたとする神話である。先のオバマの広島演説でもそれは実証された。

・2016,5,27　オバマ大統領の広島演説

日本人の90％がよかったと評する広島演説でオバマ米大統領は何を語ったのか。上述の通り、戦争を早く終わらせ、多くの人命を救ったとするアメリカ伝統の歴史観はみじんも揺るがなかった。スピーチの冒頭は次のように始まる。「71年前、明るく、雲一つない晴れ渡った朝、死が空から降り、世界が変わってしまいました。閃光と炎の壁が都市を破壊し、人類が自らを破壊できる手段を手にしたことを示したのです。」*[28] ここにはアメリカが投下したという主語がない。「閃光と炎の壁が都市を破壊し」とあるが、放射能について、原爆症で亡くなり、今なお苦しんでいる被爆者への言及もない。

さらに「広島を際立たせるのは戦争の事実ではありません。暴力を伴う紛争は太古の昔からあったことが古代の遺物からわかります…世界のどの大陸でも文明の歴史は戦争にあふれています」とある。これは古代から人類は紛争に明け暮れ、何も広島だけが戦争を象徴するものではないという暴言である。日本の縄文時代を勉強した日本人がこの演説に納得するのは理解しがたいと米国出身の詩人アーサー・ビナードは語った*[29]。

さらに「広島と長崎で残酷な終結を迎えることになった世界大戦は…」と語って、上述の通り、原爆で戦争が終わったという伝統的なアメリカの歴史観（歪曲された歴史観）を繰り返した。しかし、原爆投下の真の目的がどうであったかは今日では明らかになっている*[30]。

原爆投下の正当性というアメリカの伝統的歴史観に疑念を差し挟ませないというのは、まさに歴史の私物化に他ならない。歴史を創った人と歴史を「書く」人は違う。袖井林二郎は歴史は開かれたものでなければならないとしてパブリック・ヒストリーを主張する。「パブリック・ヒストリーとは、人々がそこから未来の生き方が学べるような開かれたものでなければならない。定説や現代の神話に疑いをはさみ、自由な議論を呼び起こすような叙述や展示こそが、パブリック・ヒストリーのあり方ではないかと言う*[31]。

袖井の言葉を使うなら、A は「記憶の共同体」を維持し、それに障害となるものを拒絶する「閉じた歴史」であるのに対し、B は日本のみならず、アジアや世界の人々にも開かれ、また、伝統的な歴史の見方に対して自由な議論を呼び起こすような「開かれた歴史」叙述となっている。

例えば、アジア太平洋戦争の記述はどうか。A では、「アジア独立への希望」という小見出しをつけ、「この日本軍の勝利に、東南アジアやインドの人々は独立への希望を強くいだきました」（236頁）と書き、さらに日本の傀儡政権を集めた大東亜会議と、アジアを米英支配から解放するとうたった大東亜宣言を高く評価して、あくまでアジア太平洋戦争がアジアの解放戦争だったと描こうとしている。右派を代表する歴史家林健太郎でさえ、「『大東亜会議』なるものを高く評価するような意見を最近若い学者からも聞いたが、会議の議事と宣言の字面だけでその内容を決定するのは、『大本営発表』によって戦争の歴史を書くのと同じく、真実から遠ざかることで

あ
る。」[*32] と指摘している。

一方、Bでは、「大東亜会議」、「大東亜宣言」という言葉は使わず、「日本は、東南アジアの国々を欧米の植民地支配から解放して『大東亜共栄圏』をつくることを宣言しました。しかし、日本軍は、むしろこの地域での支配を強めたため、各地で抗日・独立運動が起こりました」(239頁) と書いて、アジア太平洋戦争の実態がアジアの解放ではなかったことを明記している。さらに、日本軍のアジアでの行いを次のように具体的個別的に描いている。

> 日本軍は、さらにフィリピン・インドネシア・ビルマ（ミャンマー）など東南アジア全域と香港を支配しました。日本軍は、占領したボルネオ・スマトラ・ビルマでは油田を接収し、…（中略）
>
> 1942年、タイからビルマに向かう鉄道を建設するため、ビルマから10万人、タイから４万人、マラヤとジャワ島から８万人など、多くの労務者を熱帯のジャングル地帯の建設現場に送り込みました。
>
> １年あまりの突貫工事で、鉄道は完成させましたが、重労働で多くの労務者が過労や病気で倒れ、多数の死傷者を出しました。この工事では、イギリス軍などの捕虜６万人も労働させられました。インドネシアでは、戦後も「ロームシャ」という言葉が語られ、苦しい肉体労働の記憶が残りました。(239頁)

また、当時植民地であった朝鮮と台湾の人々とアジア太平洋戦争の関わりについても、日本政府が「敗戦までに70万人の朝鮮人を国内の炭鉱などに送り込んだ」「朝鮮からは軍人20万人以上、軍属約15万人、台湾からは軍人約８万人、軍属約12万人にのぼった」と記述し、最後に「一方、朝鮮・台湾の若い女性のなかには、戦地に送られた人たちがいた。この女性たちは、日本軍とともに移動させられ、自分の意思で行動することは出来なかった」(239頁) と「従軍慰安婦」という言葉こそ使っていないが、犠牲となった女性の存在にふれている。Bで特筆すべきは、ヨーロッパの戦争、特にドイツのユダヤ人迫害や抵抗運動（レジスタンス）、アウシュビッツの強制収容所の記述である。２頁が充てられ、次のようなアンネ・フランクの日記（1944年５月３日）が引用されている。

> …いったいどうして、毎日何百万という戦費をついやしながら、医療施設とか、芸術家とか、貧しい人たちのために使うお金が、ぜんぜんないなどということが起こるのでしょう。世界のどこかでは、食べ物がありあまって、腐らせているというのに、どうして一方には、飢え死にしなくちゃならない人たちがいるのでしょう。いったいどうして人間は、こんなにも愚かなのでしょう」(241頁)

さらに、別の頁でも「ヒトラーに抵抗した若者たち」という小見出しで、「白バラ」のビラの内容が紹介されている。原口によれば、ドイツの教科書ではこうした反ナチス抵抗運動を詳しく書いており、抵抗を強調することは一個の人格としての「ドイツ」「ドイツ人」の表象を断念することを意味するという[*33]。また、抵抗の記述は「内における分裂と対立」の記憶を想起する。だとすれば、Aが日露戦争や太平洋戦争中の抵抗の記述を書かないのは当然で、むしろ「国民の多くはひたすら日本の勝利を願い、励まし合って苦しい生活に耐え続けました。」(238頁) と国民の一体感を強調する記述となっている。

Bでは、「ひたすら日本の勝利を願」う多くの国民からは、外れた声が拾われている。それは『特攻月報』の史料からの引用で、特高が警戒する時局批判などの要注意発言を取り締まる事例である。こうした当局の史料からの引用で、教科書検定もクリアーしたものと思われる。例えば、日中戦争で夫が戦死した女性が知人に宛てた手紙「前略、支那の兵もやはり人間です。あちらにも私と同じ運命、いやそれ以上、悲惨な者がどんなにか多いことを思いますと、自他ともに、もはや一兵も傷つけたくありません。この悪魔のような戦争が、早く終わって下さいと願うばかりでございます」(243頁)、あるいは1940年１月の農家の女性の話として「国家なんて、虫の良いことばかりするものだ。足袋もなくて、働け働けと言われても仕方がない。それに増税だ何だと、これでは百姓がやりきれない。これも戦争があるためだから、戦争なんど敗けてもよいから、早くやめてもらいたいものだ」(同上)。

この叫びは、戦争の悲惨さ、非合理を心に刻んで、戦争とは何かを生徒たちに問いかけ、また、戦争に命がけで抵抗した人たちの姿に、二度と戦争を起こさせないという決意を喚起させる力がある。

アジア太平洋戦争の記述量もAが24頁に対してBは32頁と圧倒的に多い。戦時下の国民生活の悲惨と日本軍のアジアにおける加害の実態が詳細に描かれている。しかもそれらが具体的個別的に描かれている所にBの特色がある。

９．何を忘れるか

Bや他の教科書に書かれていて、Aに書かれていない（ごく簡単にしか触れられていない）ものは何か。それは日本国内では琉球（沖縄）やアイヌ、蝦夷などの少数派の人々の歴史であり、朝鮮半島やアジアの人々に関す

る記述である。

・蝦夷の記述

「内における分裂と対立の過去」の事例として、平安初期の桓武天皇の時代をみよう。桓武朝の二大事業は平安京の造営と蝦夷の征討にあるが、後者の記述はどうなっているか。A では、

> 桓武天皇は律令政治を立て直すため、地方政治に力を入れました。国司や郡司に対する監督を強化し、律令のしくみを九州南部や東北地方へも広げていきました。
>
> 東北地方に住む蝦夷がおこした反乱には坂上田村麻呂を征夷大将軍として派遣し、鎮圧しました。(54頁)

B では、

> 狩りや漁のくらしが多かった蝦夷の人々は、8世紀後半、朝廷の支配の拡大に強く抵抗しました。しかし、桓武天皇の時代、802年、征夷大将軍・坂上田村麻呂は蝦夷の指導者アテルイの本拠地に侵入して胆沢城を築き、アネルイを降伏させました。(50頁)

帝国書院では、「東北地方北部は律令国家の支配が及ばない人々が住んでいました。…朝廷は彼らを蝦夷とよんで差別し、城や柵を築いて戦いに備えつつ、関東地方などから兵士や農民を移して開拓を進めました。蝦夷は律令国家の支配に対し、激しい戦いをくりひろげましたが、やがて坂上田村麻呂を征夷大将軍とする軍が蝦夷のおもな拠点を攻め、東北地方への支配を広げました。しかしその後も、蝦夷の抵抗は東北各地で続きました。」(38頁)。

A の記述では、8世紀当時の日本国の領域に東北地方や九州南部は入っていなかったことがわからない。

律令国家日本の支配に激しく抵抗する東北地方の蝦夷という「内における分裂と対立の過去」は、A によっては、「忘却」の対象にしたい事実である。当時既に東北地方を支配下に置いていれば、「反乱」という言葉を使えるが、律令国家日本に服しない勢力であるゆえに、「反乱」ではなく、「抵抗」と帝国書院や B は記述しているのである。客観的に見れば、網野善彦の言うようにこれはヤマトと蝦夷の戦争であり、もし、後者が勝利しておれば、日本国という国号も都の位置も変わっていたであろう。

・琉球とアイヌの記述

B では教科書のはじめに、「歴史と出会う―6月23日、沖縄で」という見出しのもと2頁分さかれている。6月23日の慰霊の日に平和の礎を訪れた家族の写真が掲載され、90歳近い女性が、「孫たち7人と慰霊塔をおとづれ、戦火の中で亡くなった父母と姉に手を合わせ、『胸がつまる思いです』と声をふるわせていました」(5頁)とある。ここには、歴史が自らと直接かかわりをもつことを感得させ、とかく閑却されがちな「沖縄」が日本の歴史の重要な地域であり、後述する沖縄戦の記憶が日本人にとって決して忘れてはならない国民的記憶として、明記されるべきだとの主張がある。

このように、B は、沖縄やアイヌなどとかく「周辺」として日本の歴史から排除されがちな地域に十分な目配りをしている。琉球王国の記述でも両者の差は歴然としている。A の琉球王国についての記述は本文6行のみであるのに対し、B は、「アジアの海をつなぐ王国―琉球王国―」の見出しで、ほぼ2頁分が充てられている(84～85頁)。そこでは日本、中国、朝鮮、はてはマラッカ、インドにまで船を出して、仲介貿易で栄えた琉球王国の姿が子細にそして生き生きと描かれている。

次に琉球処分の記述を見てみよう。A は、「琉球については、日本政府が1872年に琉球王国の尚泰を琉球藩王として、琉球が日本領土であることを確認し、1879年に琉球を沖縄県としました(琉球処分)」(172頁)とあるのみ。B は明治初年に明治政府が、領土を確定していく過程を「北・南を組み込み、国境を引く」とのタイトルで2頁充てている(188～189頁)。

北では、江戸時代の蝦夷地を北海道として日本に組み込むことが明記され、南では、琉球王国を「日本国に組み込もうとし」「1875年には清への朝貢をやめて、元号の明治を使い、さらに、日本軍を受け入れることを命じました。琉球側はこれに抵抗しましたが、1789年、政府は警察官・兵隊と役人を派遣して、沖縄県を設置し、琉球王国は滅びました。」(189頁)とあり、琉球王国の抵抗と明治政府の強硬による琉球王国の滅亡が明記される。

アイヌの記述はどうか。A は、「蝦夷地(北海道)には、古くからアイヌが暮らしていました。彼らは狩猟や漁労、採集、さらには東北地方や中国大陸、北方の島々との交易により、独自の文化を築きました。」(85頁)とある。そして江戸時代の記述では、松前藩との交易や、その「不当な取り引き」「不満をもったアイヌの人々」が「首長のシャクシャインを指導者として立ち上がり松前藩と戦いましたが、鎮圧されました」(121頁)とある。一方、B は A に比べてアイヌに関する記述の分量が圧倒的に多い。13世紀の後半、中国の元王朝とカラフトのアイヌが戦いを繰り返した事実(73頁)に続き、北方との交易を詳しく書き(85頁)、さらに江戸時代のアイヌを2頁にわたって詳述している。

> 松前藩は、家臣や支配下の商人を蝦夷地の特定の場所に送り込み、アイヌと交易させました。しかし松前藩は、俵を小さくし、入れる米の量を大幅に減らすなどして、アイヌに不利な交易を強制しました。苦しい状況に追いやられたアイヌの人びとに、1669年、首長シャクシャインが、結束をよびかけました。2000人の

アイヌが商船などをおそうなど、戦いは蝦夷地の南部から東部に広がり松前藩は追いつめられました。

しかし、和平の交渉にもち込んだ松前藩は、その交渉の場でシャクシャインをだまし討ちで殺害しました。1789年にも、クナシリなどのアイヌの人びとは、和人（本州などから来た日本人）に対する戦いを起こしました（122～123頁）。

このようにBでは、和人の搾取とアイヌとの戦争という「対立の歴史」が描かれる。こうして、近代日本がアイヌや琉球を日本国に組み込んでいく過程が理解できる。縄文や古代の最初からあたかも現在の「日本」が存在していたかのようなAのごとき旧式の日本史からの脱却が明確に意識されている。

・戦後の記述について

日本国家の犯した理不尽な決定もAは避けている。Bは、戦時中、日本国民として徴用された朝鮮人が戦闘で負傷したが、日本国籍を剥奪されたために戦傷病者に対する年金の支給を打ち切られた事例を挙げている（261頁）。

1954年3月のビキニ事件とそれを契機に澎湃としておこった原水爆禁止運動をBは2頁わたって記述している（268～269頁）がAには記述がない。これに限らず、総じてAは民衆の記述が弱く、国家の視点からの記述が中心である。ビキニ事件によってあらためて広島長崎が想起され、被爆の実態が浮き彫りにされる。そこからわずか2ヶ月で3200万人を超える「原爆許すまじ」の原水爆禁止の署名が寄せられる様子。一方、危機感を持ったアメリカは核の平和利用を訴え、日本の世論を懐柔して原子力が日本に導入されるなど、原子力発電導入の経緯が記述されている。2011年3月の東日本大震災と福島原発事件を経験した日本が、その歴史からしっかりと学び、いまこそ継続ではなく、断絶の契機としなければならないとBを使って授業が実践出来るような記述となっている。

アメリカは、日本人の核アレルギーを払拭するため、読売新聞などを使って大々的な原子力平和利用の宣伝戦略を展開した。Bには、なんと広島の平和祈念資料館が原子力平和利用博覧会の会場となったという写真（269頁）が掲載されている。

次に1960年の安保条約の改定の記述を見よう。Aは本文7行で、一般的な事実のみ（261頁）、Bは「国会を包囲する人波―日米安保条約の改定」のタイトルで2頁の記述である（270～271頁）。Bは、東京大空襲の経験を持つ庶民「小林トミ」が安保改定案の衆議院強行採決のニュースを見てデモに立ち上がったことを取り上げるなど、個人に注目している。また、戦後の沖縄の基地について、1953年の銃剣とブルドーザーによる伊江島闘争や「島ぐるみ闘争」、さらに中学生が米軍のトラックにはねられて死亡した事件を取り上げ、運転していた米兵が無罪となるなど日米地位協定による問題点も指摘している（271頁）。Aはこうした沖縄における基地をめぐる反対闘争の記述はない。「内における分裂と対立」の象徴である沖縄については、できるだけ書かないという姿勢がここにもうかがわれる。

ベトナム戦争の記述はどうか。Aは本文で9行の記述のみで（260～261頁）、日本とのかかわりについてはふれていない。Bはベトナム戦争と日本とのかかわりについて、以下のように記述されている。

> 日本政府は、ベトナム戦争でのアメリカの軍事行動を支持しました。日本や沖縄の米軍基地から、艦艇や航空機が出撃しました。戦車や艦船の修理も日本で行われ、企業には、軍事関係の注文がありました。このころ、日本商品の輸出がのび、高度経済成長の一つの原因となりました（275頁）。

このように、Bは、日本政府がベトナム戦争を支持し、沖縄がその前線基地となって活用され、枯れ葉剤など様々な問題を引き起こし、世界的な反対運動が展開されたことを記しているが、Aにとっては、こうした「国内の分裂と対立の歴史」は「忘れさせたい記憶」なのであろう。ところが、Aは外国の歴史については「国内の分裂と対立の歴史」の記述に熱心である。例えば、「中国の民主化運動と天安門事件」という小見出しで、1989年の天安門事件を取り上げ、「学生や市民が北京の天安門広場に集まって民主化を要求しました。中国政府は、共産党独裁体制を守るため、これを武力で押さえつけたため、多くの死傷者を出しました（天安門事件）。」（267頁）と記述する。確かに、天安門事件は中国政府にとっては中国民衆に「忘れさせたい歴史」であろう。ちょうど、第一次安倍政権が沖縄戦において、「日本軍によって集団自決に追いこまれた住民もい」（東京書籍）たという「日本軍によって」を教科書検定での削除を命じたように[*34]。実際、Aでは日本軍という主語が削除されている（239頁）。

・現代の記述を見てみよう。

1991年の湾岸戦争の記述では、「わが国は巨額の戦争費用を負担しましたが、憲法の規定を理由に人員を派遣しなかったため国際社会の評価は低く、国際貢献のあり方があらためて問われる結果となりました」（270頁）とある。まるで憲法のせいで日本の国際社会での評価が低落したとわんばかりの記述である。これは著作関係者に名を連ねる百地ら憲法改正論者の意向が反映されているのであろう。同時に、この記述は外務省の見解であって、政府の見解を教科書に書くべきだとする現政権の意向を

忠実に反映している。しかし、そもそも「歴史を書く者はその当然の権利として、総ての存在から超越したものでなければならない。帝王と雖も歴史家の前に立っては、その光輝を失わなければならぬものであって、それがある故にこそ、歴史家はその任務を遂行できるのである」*[35]。続くイラク戦争の記述はどうか？Aは「イラク戦争」という言葉も使用せず、フセイン政権を倒したという記述のみである（270頁）。イラク戦争と日本がどう関わったか、イラク市民はどうなったのか、世界はどう反応したのか、全く記述がない。一方、Bは「イラク戦争と市民・子どもたち」という小見出しで、国連決議なしでアメリカとイギリスがイラクを軍事攻撃したこと。軍事施設だけでなく、住宅地などに毎晩のように爆弾が落とされ、多数の市民が死亡したこと。世界各地で反対デモや集会が行われたことが記されている（282～283頁）。さらに、「海を越える自衛隊」という小見出しで、日本政府がアメリカを支持したこと、復興支援特別措置法を制定して2004年におよそ800人の自衛隊に派遣したこと。武装したアメリカ兵の輸送など、武力行使と一体化となる活動は、憲法に違反するとして裁判が行われた例などが記されている。「大義なき」イラク戦争を日本政府がアメリカの要請に応えて支援して、自衛隊を海外に派兵したことは、戦後の歴史の大きな転換である。これらにAは全くふれないのである。

戦後の問題として避けて通れないのは、戦後賠償を含む戦後処理の問題であるが、Aは全く無関心である。

Bは、「問い直される戦後―日中国交正常化と東アジア」という見出しで２頁。中国残留孤児の具体例、中国人の強制連行・強制労働などへの戦争被害の補償、そして、金学順の証言をきっかけとする慰安婦問題が取り上げられ、1993年の慰安婦における軍の関与を認めた河野官房長官談話の一部が要約されている（280～281頁）。「外の他者に対する残虐行為の汚辱」として南京事件と慰安婦問題がAにとっての「忘れさせたい記憶」であることはすでに述べた。

Aが現政権の意向を強く受けた教科書であること。周知の通り、安倍政権は河野官房長官談話や村山談話の見直しを強く志向したものの、アメリカの意向により断念した経緯があることを考えれば了解されるであろう。

また、東日本大震災と福島原発事件の記述はAはわずか本文で９行のみ（272頁）。その中に「被災地の人たちの公共心やがまん強さ、責任感などは世界からたたえられました」と日本人の「すぐれた国民性」（273頁）は書いても、被災地で放射能におびえながら避難生活をする人々の姿は全く見えてこない。むしろそうした現実に目を背け、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの招致を写真入りで掲載して、「未来の歴史」を志向しましょうと書かれている（273頁）。前述の通り、福島原発事故は完全にコントロールされている、東京は大丈夫といって五輪招致に成功した安倍首相の意向にそった内容となっている。

10.「外の他者に対する残虐行為の汚辱」

・南京事件についての記述

Aは日中戦争の記述の中で「日本軍は12月に首都・南京を占領しましたが…」とあり、註に「このとき、日本軍によって、中国の軍民に多数の死傷者が出た（南京事件）。この事件の犠牲者数などの実態については、さまざまな見解があり、今日でも論争が続いている。」（229頁）と他のどの教科書よりも記述量が少ない。

Bでは、日中戦争を「日本の侵略・中国の抵抗」という見出しで2頁が充てられ、上海・南京・重慶へ戦線が展開される様子が以下のように記されている。

> 日本軍は、多数の死傷者を出しながら上海を占領し、さらに国民政府の首都・南京へ向かって進撃しました。日本軍は食料などの物資を十分に補給されず、現地で調達せよと命令されていました。そのため、日本軍が通過する地域の住民は食料を要求され、略奪・殺傷などの被害を受けました。
>
> 日本軍は12月、南京を占領しました。このとき、国際法に反して大量の捕虜を殺害し、老人・女性・子どもを含む多数の市民を暴行・殺害しました（南京事件）。日本では、南京占領を祝う行事が盛大に行われました（235頁）。

続いて「重慶の大爆撃」と題して、重慶への無差別爆撃が「1940年になると、空襲は112日間連続で行われ、市民の死傷者は9000人を超えました。中国側は、市民も作業に参加し、1865本の防空トンネルをつくって、避難しました」（同上）と詳述される。

さらには中国共産党の八路軍の徹底抗戦の様子と、日本側の「焼きつくす・奪いつくす・殺しつくす」作戦（三光作戦）が記述されている。

さらにBでは囲み記事に「南京市に住んでいた夏淑琴（当時８歳）の話」として、銃剣をもった日本兵が家に侵入し、父は撃たれ、母と乳飲み子の妹も殺害、祖父と祖母はピストルで、15歳と13歳だった姉は暴行されて殺されました。…と記述されている（同上）。

AとBの差は歴然である。Bが『かれら』の記憶、すなわち中国人の記憶をすくい取って、『われわれ』が『かれら』からどう見られているか、生徒にその想像力をはたかせる契機をつかませようとするのに対して、Aは『かれら』の記憶に無関心である。そして、「外の他者に対する残虐行為の汚辱」を隠そうとする。南京事件の犠牲者数などの実態については、さまざまな見解があり、今日でも論争が続いているとして、中国側が主張す

るような大虐殺ではなかったと主張したいように。しかし、現代歴史学ではすでに、決着済みの問題である[*36]。ところがAの著作関係者や自民党及び「日本の前途と歴史教育を考える議員の会」などは、「南京事件は捏造と書かせるべきだ」[*37]で一致している。

11．何をきわだたせるのか

何を忘れるかについては、「内における分裂と対立の歴史」と「外の他者に対する残虐行為の汚辱」の事例をあげたが、逆に、では一体Aは「何をきわだたせるのか」について見よう。

まず第一にそれは、神話と天皇の記述の多さである。Aは「歴史ズームイン」として「神話に見るわが国誕生の物語」という見出しで２頁充てている（50～51頁）。ここでも先に見た「わが国」が使用されるが、神話の時代に「わが国」日本は成立していない。ところで、神話は戦前の教科書では大きく扱われたが、現在使われている教科書で、このように神話を特別２頁を割いて記述した教科書はない、Bはもちろん、東京書籍や帝国書院も神話を取り上げていない。

Aのコンセプトである日本歴史が古代から一貫していること、日本人が分裂や対立なくまとまってきたことの中核に天皇の存在があること、そして日本の独自性を強調している。さらに「三種の神器と神武天皇」との小見出しで、初代神武天皇が橿原で即位したことと、三種の神器が即位の継承に使われていること、２月11日の「建国記念の日」が説明される（50～51頁）。そして、現代では「国民とともに歩んだ昭和天皇」という見出しで１頁充てられている（257頁）。Aの昭和天皇の記述は他の教科書に比し突出している。しかし、その天皇像は史実か。

日米開戦の直前、９月６日の御前会議で天皇が明治天皇の御製を詠み上げ、「日米交渉の継続を重臣たちに示唆しました。しかし、結局、開戦を回避できず…」（257頁）と書かれている。しかし、開戦前の天皇の御製について、五味川純平は『御前会議』（1987年）のなかで次のように指摘している。御製の朗読の代わりに、あるいは朗読のあとで、天皇がもし戦争を欲しなかったのなら、なぜ「朕は戦争を欲せず」と言わなかったのか？　詩歌の朗読では、意思は明瞭に感取されても、手続き上忖度でしかないから決定力をもたない。沈黙の人が、決定的瞬間に沈黙を破る必要を感じ、しかも決定的なことは言わなかった。明らかに責任回避であったと[*38]。

また、天皇・マッカーサー会見における「私の身はどうなろうとかまわないから、国民を救って欲しい」という天皇発言については、その原典である『マッカーサー回想記』の記述の信憑性は低いというのが学会の定説である[*39]。会見の二日後、天皇は木戸内大臣に次のように下問している。天皇を戦犯として裁けという「米国の論調につき頗る遺憾に思召され、之に対し頬被りで行くといふも一つの行方なるが、又、更に自分の真意を新聞記者を通して明らかにするか、或いはマ元帥に話すと云ふことも考へらるるが如何」[*40]。「私が全責任を負う」という人間が戦犯となることを気にするだろうか。また、2002年に外務省と宮内庁によって公開された第１回天皇・マッカーサー会見録にも、こうした天皇発言はない。

はたして、Aが書くように「天皇はひたすら平和を愛好したのだろうか」。

ポツダム宣言の発せられた直後の７月31日、天皇は側近の木戸にこう語っている。「種々考えて居たが、伊勢と熱田の神器は結局自分の身近に御移ししてお守りするのが一番よいと思う。而しこれを何時御移しするかは人身に与うる影響をも考え、よほど慎重を要すると思う。自分の考えでは度々、御移しするのも如何かと思う故、信州の方へ御移しすることの心組みで考えてはどうかと思う。此辺、宮内大臣と篤と相談し、政府とも交渉して貰いたい。万一の場合、自分が御守りして運命を共にする外ないと思う」[*41]。ポツダム宣言受諾に際してこだわった国体護持とは、すなわち三種の神器の護持であったのだ[*42]。Aが神話でせっかっく三種の神器にふれたのであれば、上述の通り昭和天皇がいかに三種の神器を守るために心を痛めていたかをAは書くべきであったろう。

「何をきわだたせるか」は日露戦争の記述にもあらわれている。

Aは日露戦争の記述が２頁、さらに「歴史ズームイン」で「日露戦争の舞台裏」というタイトルで１頁充てられている（196頁）。Bはもとより、東京書籍や帝国書院に比して突出している。西洋列強の白人支配に楔を打ち、アジア・アフリカの人たちに希望と勇気をあたえた日露戦争の世界史的意義を強調し、日本人のアイデンティティを鼓舞したいようである。司馬遼太郎の『坂の上の雲』が日本人の誇りを取り戻す小説として絶大な支持を得ていたように[*43]。また、この日露戦争の記述は2015年８月14日の安倍総理70年談話が、日露戦争の世界史的意義を強調しているのと軌を一にしている。

しかし、Bはもとより帝国書院でも、日本が日露戦争に勝利したことが植民地支配に苦しむアジアの人々に近代化や独立への希望と自信を与えたことを記述しているが、同時に、「アジア諸国の期待とは異なり、日本は韓国の植民地化を進め、陸軍・海軍の軍備を増給させるなど、帝国主義としての動きを活発にしていきました」（182頁）と書き、さらに「日本に対するアジア諸国の二つの感情」として、ネルー著『父が子に語る世界史』から以下のように引用されている。「日本のロシアにたいする勝利がどれほどアジアの諸国民をよろこばせ、こおどりさせたかを、われわれはみた。ところが、その直後

の成果は、少数の侵略的帝国主義諸国のグループに、もう一国をつけくわえたというにすぎなかった。そのにがい結果を、まず最初になめたのは、朝鮮であった」(183頁)。

そして、日露戦争が韓国併合へのプロセスであったという歴史の事実が語られる。Bは、「戦場は中国だった―日露戦争」という見出しで2頁が充てられ(198～199頁)、この戦争が朝鮮中国をめぐる帝国主義戦争であることを示唆している。Bには東郷平八郎も乃木希典も出てこないが、戦争における日本とロシアの民衆の姿が活写されている。国家の記憶か民衆の記憶かの違いが端的に表れていると言えよう。総じてBは従来のように歴史上の人物や事件名を使わずに、歴史事象を叙述するという方針にもとづいている。人物名や歴史事象の名辞をたんに覚えるのではなく、内容そのものをゆたかに描こうとしている。また、与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」は、すべての教科書に掲載されているが、Aでは、人物コラムの中で、以下のように記述されている。

> 日露戦争の際には、出征した弟の無事を願う詩「君死にたまふことなかれ」を発表し、話題となりました。しかし太平洋戦争(大東亜戦争)の際には、
> 水軍の　大尉となりて　わが四郎
> み軍にゆく　たけく戦へ
> と、海軍大尉として出征する四男を励ます歌も残しました。11人の子の母親として、家族を重んじたその姿勢は、生涯を通じて歌に表されたのです。(248頁)。

日露戦争に反対する晶子ではなく、太平洋戦争を支持する晶子像を提示している。そして、家族を重んじた姿勢が評価される。日露戦争は前述の如く、「わが国」の「存立危機」をまえに日本人が一丸となって戦った戦争であり、これに反対するなどもってのほかである。Bのように「すめらみことは戦ひにおほみずからはいでまさね」では、天皇を中心とする日本国のアイデンティティが揺らいでしまうのである。

12. アジアや世界に目を閉ざす育鵬社教科書

Aは日本以外のアジアや世界への視点が非常に弱い。そもそもAは教科書のタイトルからして他の教科書とは違ってわざわざ「日本の歴史」としている。一方、Bのタイトルは「人間の歴史」となっており、帝国書院も「歴史　日本の歩みと世界の動き」と世界を含む大きな視野に立っている。もちろん、日本の歴史が中心とは言っても、周辺のアジアや世界の影響から日本が無縁だったことはなく、大きな影響を受けている。自国の歴史は周辺の歴史や世界の歴史と密接に関わっている。そうした視点がAは非常に弱い。アジアや世界との交流、彼らが日本をどう見ていたのかを知ることも日本の歴史である。入江昭は国という枠組みを超えた現象、宗教の発達や世界経済の発展も歴史の一部であり、自国史のなかには当然他国史も含まれる、他の国とどのような関わり合いをもってきたかを調べることは重要だが、他の国が自分の国をどうとらえ、どのように理解しているかを認識するのも、歴史研究上、欠かせない視野だと言う。そして、「各民族、各国民は世界に共生し、同じ時間を共有するものである。その事実を把握し、お互いがお互いの運命とどう関わり合っているのかを探る。それが歴史を学ぶ根本的目標。歴史は各国個別ではなく、世界中のすべての人々に共有されるもの」[*44] と主張している。Aが狭い日本という空間に自足して「記憶の共同体」を維持しようとするのに対して、入江の言う各民族がお互いの運命にどう関わっているのかを探るという開かれた歴史をBは志向している。

中学校の歴史では日本史と世界史の両方を学ぶことになっているが、Aは他の教科書と比較して世界史の扱いが小さく不十分である。例えば、近代欧米の市民革命や産業革命の記述はどうか。Bはアメリカ「合衆国の成立」、「フランス革命」、「産業革命」、「国民国家の成立」というタイトルで各2頁の合計8頁、他の東京書籍や帝国書院も数頁が充てられているのに対して、Aはわずか2頁のみである。近代市民革命によってもたらされた普遍的原理である人権や民主主義の成立過程がこれでは全くわからない。先述の通りAの陣営には、「人権」について日本的な人権概念があるとして、憲法改正を主張する人物がいたことを思えば、近代市民革命の「軽視」も宜なるかなである。Bでは、「合衆国の成立」でイロコイ連合にもふれ、また独立宣言の重要部分(平等権と生命・自由・幸福追求権)も要約されている(146～147頁)。現場の教師にとっては日本国憲法13条との関係にも言及できるであろう。いずれにせよ、合衆国の成立やフランス革命といった歴史のダイナミズムを感得させる重要な場面を省略した教科書で生徒は歴史のおもしろさを学ぶことが出来るであろうか。

ところで、日本の隣国、朝鮮半島との関係の歴史はどう書かれているか。

・朝鮮通信使の記述

Aは、江戸時代の朝鮮通信使について、本文で4行、脚注で、「1811年までに計12回の使節が日本を訪れた」との記述のみ(121頁)。一方、Bでは、「江戸を行く朝鮮通信使」という見出しのもと2頁を充てている。使節の規模からこれを迎え入れる各藩が「行列が通る道を清掃すること、道沿いの家の主人は羽織を着て迎えること、見物人に不作法がないようにすることなどの触れを出し」(124頁)て丁重に迎えた様子などが具体的に書かれている。ここでは近代以降の朝鮮人に対する差別意識

はほとんどなく、むしろ使節に対する敬意がうかがえる。また、「申維ハンと雨森芳洲」と題して、二人の会話を採録している。雨森は申に対して、日本と朝鮮は隣の国で、国王と将軍が国書を交わしているのに、朝鮮の書物には、日本を倭賊としているが、これはなぜかと問うと、申は、「それは壬辰の乱（豊臣秀吉の朝鮮侵略）のあとに書かれた本だろう。秀吉はわが国にとってはかたきであり、朝鮮人がこれを賊というのは当然である。ただ、秀吉も日本では、何らかの功績があったのではないか」、雨森「秀吉は、天下の災いとともに、マムシが生まれてきたような者だ。朝鮮ばかりか、日本でも、皆殺しにあった一族は数えきれない。だが、秀吉の天下平定によって、戦の世が終わった」（124～125頁）。

つまり朝鮮人にとって、秀吉の朝鮮侵略はこうした形で国民の記憶に刻まれているということを知ることは重要なことだ。周りの国が日本をどう見ているかの視点である。相手の立場を知れば、明治新政府が、朝鮮に国交樹立を求めた際、当時鎖国政策をとっていた朝鮮が交渉に応じなかった背景も理解できるはずだ。

・秀吉の侵略の記述はどうか。

A は小見出しが「対外政策と朝鮮出兵」で本文15行（111頁）の記述に対し、B は「僧が見た朝鮮の民衆―秀吉の朝鮮侵略―」の見出しで２頁を充てている（104～105頁）。帝国書院も東京書籍も「朝鮮侵略」を使用している。「朝鮮出兵」は昭和時代の教科書の記述である。これだけでも A が最新の歴史学の成果に学ぼうとする姿勢に欠けていることがわかる。B ではその目的も「明の征服をめざし」と明快である。また、医師として従軍した一人の僧侶に焦点を当て、彼の日記から朝鮮民衆の姿を次のように描いている。「人買い商人が日本の軍勢のあとについて、朝鮮の老弱男女を買い集め、首に縄をつないでひき連れている」「牛馬を引かせ、荷物を運ばせているありさまは、見るにしのびない」（104頁）。他に「朝鮮民衆のたたかい」など朝鮮側の記述が他のどの教科書よりも豊富である。日本が隣国に何をしたかを詳しく知ることも日本史の重要な学習対象である。

ここでも A が、文禄の役、慶長の役などの歴史名辞にこだわるのに対し、B にはそうした名辞は一切ない。しかし、朝鮮侵略の実態が日本側のみならず朝鮮の側からも活写されている。

・韓国併合の記述

A では1910年の韓国併合に至る過程が淡々と書かれ、「1910年、伊藤博文が安重根に暗殺される事件が起こりました。1910年、政府は韓国併合に踏み切り、その統治のため朝鮮総督府を置きました」（193頁）とある。この書き方では伊藤の暗殺が韓国併合の契機となったと誤解する。伊藤暗殺のまえにすでに併合の方針は決まっていた。B は、「土地を奪われた朝鮮の農民―韓国併合」の見出しで２頁が充てられる（202～203頁）。伊藤博文も安重根も登場しないが、東洋拓殖会社によって土地を奪われた朝鮮農民の実態やその抵抗が活写されている。また、併合後の朝鮮での教育も具体的に記述しているのに対し、A は「日本語教育などの同化政策が行われたので、朝鮮の日本への反発は強まりました」（193頁）とあるのみである。このように A は人物や日韓議定書、日韓協約などの歴史名辞は多く出てくるが、内容がうすい。これでは人物や歴史名辞を覚えるだけの旧来の歴史授業とかわらない。B は逆に人物や歴史名辞を減らし、内容の充実に努めている。旧来の暗記物からの脱却が意図されている。

韓国併合100年にあたる2010年８月、当時の菅首相は首相談話を発表した。「ちょうど百年前の８月、日韓併合条約が締結され、以後36年に及ぶ植民地支配が始まりました。三・一独立運動などの激しい抵抗にも示されたとおり、政治的・軍事的背景の下、当時の韓国の人々は、その意に反して行われた植民地支配によって、国と文化を奪われ、民族の誇りを深く傷つけられました」「この植民地支配がもたらした多大の損害と苦痛に対し、ここに改めて痛切な反省と心からのお詫びの気持ちを表明いたします」[*45]。日韓併合条約は韓国併合条約の誤りだが、B の朝鮮半島に関する記述は、首相談話に沿った記述である。この首相談話に反発したのが、当時野党であった自民党であり、安倍氏の周辺や A の著作関係者であった。

13. おわりに

A の著作関係者で安倍内閣の「教育再生実行会議」委員でもある八木秀次は「戦後教育界が日本の国力をそいできた。日本人のアイデンティティを見直し、世界の模範となる国にする」「後世に、正しい歴史認識を残す必要がある」[*46]と述べている。安倍政権は教科書の「近隣諸国条項」の見直しなど検定制度を改定し、いわば「教科書国家統制法」なるものを想定している[*47]。そうなれば、B のような教科書は検定で失格となる。教科書によって国の形を変える。見えてくるのは、憲法改正による「戦後レジュームからの脱却」の完成である。

注

*１ 育鵬社教科書を採択した金沢市の経緯は以下の通り。学識経験者や PTA 役員、学校長などで構成される採択委員会が出した答申で評価が高かったのは東京書籍であった。ところが、教育委員会（７人）での検討で、東京書籍の南京事件の記述はことさら表記する必要はないとする意見があり、一方で、育鵬社については「昭和天皇のことがきちんと書かれている」「全体として日本人として元気になれる表記が多い」と評価する

声が出た。結果的に帝国書院と育鵬社に絞られ、再度見直す時間を取り、最終的に４対３で育鵬社に決定したという。なお、採択経緯に疑義が出され、市民団体などから撤回要請が出されている（古河尚訓「育鵬社中学校歴史・公民教科書採択までの経緯」『読もう考えよう　育鵬社教科書』いしかわ総合研究所、2016年、５～６頁）。

*２『東京新聞』2006年９月９日。

*３ 渡部昇一「東京裁判史観を克服　『安倍談話』は百点満点だ！」『WiLL』2015年10月号。

*４ 野田正彰は、かつて「新しい歴史教科書をつくる会」のメンバーであった小林よしのり等を念頭において、以下のように述べている。「…マンガ家が国家主義を煽る中学歴史教科書の著者に名を連ねるまでになった。彼ら、歴史学者でない者が歴史教科書を書き、文部科学省はそのいい加減な記述を認定し、歴史学を学んだ教師に押し付けようとしてきた。日本には歴史学者がいないかのようである。傍らになければならないものが、表に躍り出ている。」「閉ざされた不安から開かれた対話へ」『世界』岩波書店、2006年２月号、92頁。

*５ 不破修「学びの根元を潤す歴史教科書を」『学び舎中学歴史教科書　ともに学ぶ人間の歴史』学び舎、2015年、10頁。

*６ 氏岡真弓「学び舎の問い　歴史教育はどうあるべきか」『世界』2015年８月号、233頁。

*７ 安井俊夫「問いを生み出す歴史教科書へ」前掲『学び舎中学歴史教科書　ともに学ぶ人間の歴史』３頁。

*８『日本人の歴史教科書』自由社、2009年、１頁。

*９ 同上、同頁。

*10 原口健治『歴史教科書とナショナリズム　日本とドイツ』春風社、2016年、160頁。

*11 鶴見俊輔『昭和を語る　鶴見俊輔座談』晶文社、2015年、192頁。

*12 加藤周一は1960年安保闘争のさなか、久野収との対談で次のように語っている。「日本の戦後の教育で…近ごろは巻き返しもあるようですが、教科書の中で日本の戦争を弁護していない。そういう歴史の教科書は世界中にないんですよ。外国では自分の国の戦争を弁護しているから日本も、というのは弁解的だと思うんだ。むしろ、逆に自分の国を弁護していないことを誇ればいいと思う。フランスがやった植民地戦争をフランスが誇るから、日本も満州事変を弁護するというんではなくて、まず、悪いものは悪いと言っているということ自身が、桂離宮より誇るに足ることだと思うんですよ。…」（加藤周一・久野収「六十年安保と戦後民主主義」1960年『＜国民的記憶＞を問う　加藤周一対話集３』かもがわ出版、2000年、176～177頁）。

*13 前掲『歴史教科書とナショナリズム　日本とドイツ』161頁。

*14 同上、201～202頁。センは、人間のアイデンティティが文明や文化などの単一的な区分法によって分類出来るという「単眼的」なとらえ方を厳しく批判している。そして、唯一のアイデンティティとされるものを押しつけることは、しばしば党派的な対立をあおると警告している。（アマルティア・セン『アイデンティティと暴力』勁草書房、2011年、２～４頁）。

*15 同上、204頁。

*16 中沢新一『僕の叔父さん　網野善彦』集英社新書、2004年、70頁。

*17 原田圭一『日清戦争』吉川弘文館、2008年、21～23頁。

*18 同上。他に高橋秀直『日清戦争への道』創元社、1995年、中塚明『歴史の偽造をただす』高文研、1997年。

*19『朝日新聞』2008年４月２日。

*20 加藤周一・大江健三郎「五〇年目に問う戦後」前掲『＜国民的記憶＞を問う　加藤周一対話集３』295～297頁。

*21『読売新聞』2013年９月８日。

*22『朝日新聞』2011年５月31日。

*23 台湾でも2016年10月、蔡英文政権は東日本大震災を契機とする民意の転換を背景に、「2025年に原発ゼロ」を閣議決定した（『朝日新聞』2016年10月23日）。

*24 前掲『歴史教科書とナショナリズム　日本とドイツ』85～86頁。

*25 同上、86頁。

*26 同上、同頁。

*27 同上、87頁。

*28『朝日新聞』2016年５月28日、オバマ大統領演説の引用はすべて『朝日新聞』2016年５月28日による。

*29 アーサー・ビナードさんの講演「日本語のヒバクと未来を語る―岩波文庫『原爆詩集』発刊に寄せて」2016年９月18日、豊中市立岡町図書館。

*30 原爆投下の歴史的経緯については、拙稿「大学における日本近現代史の授業実践（Ⅱ）広島、長崎への原爆投下をどう教えるか―フクシマ後を視野に」（兵庫教育大学『学校教育学研究』第26巻、2014年）を参照。

*31 袖井林二郎「病んだ記憶を治癒する『開かれた歴史』の視点　米国の原爆展中止をめぐって」『毎日新聞』1995年２月７日。

*32 林健太郎『歴史からの警告』中央公論社（文庫版）1999年、178頁。

*33 前掲『歴史教科書とナショナリズム　日本とドイツ』247頁。

*34『朝日新聞』2007年３月31日。

*35 宮崎市定『史記を語る』岩波新書、23～24頁。

*36 笠原十九司『南京事件論争史』平凡社新書、2007年、小野賢二・藤原章・本多勝一編『南京大虐殺を記録した皇軍兵士たち』大月書店、1996年など多数。
*37『朝日新聞』2013年４月18日。
*38 大系　日本の歴史14、江口圭一『二つの大戦』小学館、1989年、311～312頁。
*39 豊下楢彦『昭和天皇・マッカーサー会見』岩波現代文庫、2008年、３～４頁。
*40『木戸幸一日記』（下）東京大学出版会、1966年、1238頁。
*41 木下道雄『側近日誌』文藝春秋社、1990年、170頁。
*42 小森陽一『天皇の玉音放送』五月書房、2003年、21頁。
*43 アイデンティティの視点から司馬遼太郎の『坂の上の雲』を批判したのが半沢英一『雲の先の修羅―「坂の上の雲」批判』東信堂、2009年である。
*44 入江昭「『歴史』とは何か」『朝日新聞』2001年６月７日。
*45「首相談話全文」『朝日新聞』2010年８月11日。
*46『朝日新聞』2014年３月２日。
*47『産経新聞』2013年４月10日。